

ブックガイド

No. 19 2017. 3. 11

■復興・防災

『はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト記録集』 他

はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト実行委員会 2014.3-2016.3 LS706/H4/

「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」とは、福島県立博物館が県内大学・文化施設・NPO等との連携し、福島の文化・歴史・自然の豊かさを再発見することと福島が抱える課題を共に考える場を生み出すことを目的としたアートプロジェクトです。

2012年から各年毎にまとめられた「活動記録集」と事業毎の「報告書」。全て小冊子ですが中身は濃い。3地域のそれぞれが抱える問題や課題に文化的な面からアプローチしています。いち早く開始された写真、伝統文化の継承を願う飯館村中学生の取り組むコミュニティ復活プロジェクト、「黒塚」を題材としたダンス、祭り・食・自然や環境…それぞれが高い芸術性を持ち、再生への静かなそして確かな一歩を自分たちの手で生み出す力となっています。web上で発信はさらに詳しく一読を…。<http://hamanakaizu.jp/>

『奇跡の醤（ひしお） 陸前高田の老舗醤油蔵 八木澤商店 再生の物語』

竹内早希子／著 祥伝社 2016.11 588.6/¥16Y

東日本大震災で、岩手県陸前高田を襲った津波によって、二百年の歴史を持つ老舗醤油蔵八木澤商店は、醤油屋にとって命ともいえるもろみや杉桶、製造設備のすべてを失いました。その壊滅的な被害に、誰もが廃業を覚悟しますが、9代目の河野通洋氏は、震災5日目にして再建を宣言し社員と共に必死に取り組みます。若き経営者の覚悟と、深い信頼関係で結ばれている社員たち、そして陸前高田の人々の5年間の苦闘と復活再生を、緻密な取材で丁寧に描いたノンフィクションです。醤油を作る微生物についての話も興味深いものがあります。そして、働くこと、前向きに生きることの大切さにも気付かされる一冊です。

『災害文化の継承と創造』

橋本 裕之／編 臨川書店 2016.2 369.3/¥162/

津波や地震の言い伝えや石碑等だけが災害文化ではない。この本では伝統・民俗・地域社会のコミュニティーの有り様などの在来知を「災害文化」と位置づけ、復興の動きを新たな視点で捉えています。

外からの押し付けの「復興」ではなく、これらの在来知に目を向け、その意味を理解し、真にその地域に合った「復興」の道を探ることが望まれます。そのひとつの道標となるような一冊です。

『Sacrifice 未来に捧ぐ、再生のいけばな』

片桐 功敦／著 青幻舎 2015.10 LS793/K1/1

沿岸で被災した地域で花をいけた華道家の、写真による作品集です。震災から2年経って突如咲き始めたという水葵の花などを用いた作品は、力強く美しく、とても目をひきます。海岸などに置かれた命の躍動を感じる花々は、被災と再生のドラマを秘めているようです。

『コミュニティとアート 被災地いわきからの提言』

Wunder ground／[編著] 祥伝社 2016.3 LS701.9/W1/3

いわき市の下神白復興公営住宅でのアートによるコミュニティ再構築支援の記録集です。多様な背景を持つ双葉郡4町の住人と、アーティスト・コーディネーター・コミュニティ支援員が協力し、アートの制作、イベントの開催を通して新たなコミュニティの構築に取り組みました。住民参加の工夫や、住民の「自立」を目指した関わり方が、サブタイトルの“来るべき超高齢化社会のために”、コミュニティを考える色々な人の参考になるように思います。

『復興建築ドキュメント 東日本大震災後の建築と環境』

柴崎 恭秀／編著 会津大学短期大学部 2015.4 LS527/S5/2

現在も整備が続けられている災害公営住宅や復興に寄与する建築の数々。その記録としての本書は、異なる発想や用途を持った復興建築が、震災後の人びとの暮らしをどのように支えていけるかを考えていきます。福島からは「浪江 in 福島ライブラリーきぼう」、「相馬市 LVMH 子どもアート・メゾン」、再生の建築物としての「猪苗代ギャラリー」などが紹介されています。対となる1冊『仮設住宅アーカイブス—福島の応急仮設住宅』(LS527/S5/1)も所載しています。

『防災・減災につなげるハザードマップの活かし方』

鈴木 康弘／編 岩波書店 2015.3 369.3/ｽﾏ153/

2000年頃より普及が進んだハザードマップは過去に発生した災害とこれから発生が予測される災害に基づいて作成されます。ではなぜ東日本大震災では「想定外」が多く語られたのでしょうか？

津波・水害・土砂災害・火山などから生命財産を守るために、ハザードマップをいかに理解し、「生きた地図」にするための日常の取組みとは？

■各組織の震災対応

『震災編集者 東北のちいさな出版社<荒蝦夷>の5年間』

土方 正志／著 河出書房新社 2016.2 023.067/ﾋﾞﾗ162/

仙台の出版社「荒蝦夷」の代表である著者が、震災後の5年間を一個人の視点から見つめ直した1冊です。友人を津波で失い、会社自体も存続の危機に晒される等の困難に遭いながらも、社名の如く力強く日々を踏みしめていく様が描かれています。個人の視点で書かれた本でありながら「東北」「震災」に関わる人々の声がたつぷりと味わえるのは、それらのテーマに長く向き合い続けてきた著者の言葉だからこそではないでしょうか。

『ドクター小鷹、どうして南相馬に行ったんですか?』

香山 リカ／著 小鷹 昌明／著 七つ森書館 2015.4 LS498.1/K9/1

大学病院を辞めて、南相馬にある原発からいちばん近い病院に務める神経内科医の小鷹昌明さんと、東京を拠点に“支援者支援”をおこなう精神科医の香山リカさんが、2013年9月から2015年1月までに行った往復書簡をまとめた本です。復興や地域医療などの深刻な状況や、これから被災地に必要なものは何か。書簡という読みやすい形で、今までのことやこれからのことを考えられます。小鷹さんと香山さんはそれぞれ多数著作を出していますので、そちらもぜひ。

■原子力問題・過去の原発事故

『福島第二原発の奇跡 震災の危機を乗り越えた者たち』

高嶋 哲夫／著 PHP 研究所 2016.3 543.5/ﾀ163/

異常事態が起きた時、原発は「止める」「冷やす」「閉じ込める」の段階でその安全性が保たれます。津波により電源装置（冷却機能）を失い、あわやメルトダウンという危機に瀕しながらも、「全基冷温停止」という偉業を成し遂げた福島第二原発の奇跡は、第一原発の事故に隠れ多くを語られることはありません。震災から5年、その時、そこにいた人々の奇跡の決断と行動を記録するルポルタージュです。

『アメリカは日本の原子力政策をどうみているか 岩波ブックレット No. 958』

鈴木 達治郎／編 猿田 佐世／編 岩波書店 2016.10 539.091/ｽ16X/

日本の原子力利用には、日米原子力協定が大きく関わっています。この協定がどのように推移するかが、日本の原発政策に影響を与えています。この本では、日本の原子力政策がアメリカの思惑をどのように受けてきたのかを知ることができます。これからの原子力問題を考えるうえで重要です。

■メディア・報道・写真集

『まちはしずかにあゆみだす 3.11 後の21章』

中日新聞編集局／編 中日新聞社 2016.3 369.31/ﾀ163/

東海地方を中心として発行されている中日新聞に、震災後3年目から「3年目の被災地から」「4年目」「5年目」の副題で連載されたもののうち、21の物語が選り抜かれています。「人は大切なものを失い喪失感を抱いたとき、どう立ちあがってゆけばよいのか」。被災地の人々の思いと再起への静かな歩みが記されています。

『被災地から考える3・11とテレビ』

坂田 邦子／編 三村 泰一／編 サンパウロ 2016.3 699.8/ﾀ163/

震災直後、テレビ各局の被害報道は都市部に集中し、小規模町村の被害はほとんど報じられませんでした。そこに住む人の「自分達の被害状況を知りたい」あるいは「自分達の被害を正確に発信してほしい」と願う声に応えられなかった“テレビ”とは、一体誰のためのメディアだったのでしょうか。東北大院の学生らによる、震災報道の課題点を投げかけた論文が5編収録されています。

『かえるふくしま』

矢内 靖史／写真・文 ポプラ社 2016.2 LS726.7/Y1/1 P/ヤ/

”かえる”は、古来より「無事かえる」に通じ、この本に込められた願いは「みんながふるさとに《かえる》こと」がです。

一見すると美しい写真集ですが、この小さな水生生物に込められたメッセージは、震災と原発事故の悲惨をえぐり出します。

著者は、新聞社の報道カメラマン。あとがきには、「3.11後はつらく眠れない日も続き、そんなとき、つかれた心をいやしてくれたのもカエルたちでした。」と記します。著書に『ふくしま虫の目探検』（2008）ほか。

■文学・体験記

『汐凧を捜して 原発の町大熊の3・11』

尾崎 孝史／著 かがわ出版 2013.10 LS369.31/08/1

2016年12月、大熊町で最後の行方不明者で当時7才だった木村汐凧（ゆうな）さんの遺骨が見つかりました。自宅から数百メートル離れた海岸沿いで、作業員が汐凧さんのマフラーを発見。その付近から首やあごの骨が見つかったそうです。2013年に出版された本書ですが、今回のニュースを受けて、原発事故のために娘の捜索を十分にしていられなかった父紀夫さんの無念を今一度ふりかえらずにはいられません。

『挽歌の宛先 祈りと震災』

河北新報社編集局／編 公人の友社 2016.6 369.31/林166/

震災後、東北の人々や生死を扱う宗教者たち、表現者たちが失われたものに捧げた祈りをテーマにした、東北地元紙の新聞連載記事がまとめられています。震災を機に東北大学で養成がはじまった「臨床宗教師」の、宗教・宗派の垣根をこえた取り組みについても紹介。未来を生きていくために死者をも慈しむ人々の姿に胸を打たれます。

『A.E. あるいは希望をうたうこと 新実徳英の「音・人・出会い」』

新実 徳英／著 アルテスパブリッシング 2016.6 760.4/ト166/

震災直後に《つぶてソング》を発表した作曲家・新実徳英が、2013年まで綴ったエッセイ集。タイトルの『A.E.』とはAfter the Earthquake、震災後という意味で、著者が3.11以降に発表した曲に付している作品番号です。これには「震災のことを忘れない」という思いがこめられています。震災から6年が過ぎた今も、復興へ向かって一人ひとりが僅かでも進んでいくことが大切だと感じる一冊です。

『16歳の語り部』

雁部 那由多／語り部 ポプラ社 2016.2 369/か/

語り部の活動を行う3人は震災当時、東松島市立大曲小学校の5年生でした。「震災の話はしてはいけない」と思っていたことや、大人が子どもに何も話してくれなかったことが辛かったことなど、「小さすぎる子どもでもなく、大人でもなかった」彼らが震災をどのように受け止め、何を考えてきたのかが、素直な言葉で綴られています。様々な葛藤を抱えながらも伝える彼らのメッセージは、確かに未来を見つめています。

『のっぽのスイブル155』

こもり まこと／[作] 偕成社 2016.1 P/コマ/

東日本大震災で被災した港や橋の復旧工事のために活躍した水陸両用ブルドーザーが絵本になりました。錆だらけで眠っていた水陸両用ブルドーザー・スイブル155が、地震と津波で被災した橋の工事のために息を吹き返し、大活躍します。震災による津波で壊れてしまった港や橋の復旧のために、建設機械関係者たちが水陸両用ブルドーザーを蘇らせてくれことを、この絵本で子どもに伝えたいと思います。

『奇跡の犬、ウィル 福島から来た学校犬の物語』

吉田 太郎／著 セブン&アイ出版 2016.2 916/ヨ/

東日本大震災で被災し福島県新地町をさまよっていたところを保護されたイングリッシュ・セッターが、飯野町のシェルターから東京の小学校に引き取られ、学校犬ウィルとして生きていきます。震災のことをよく知らない子どもたちも、ウィルとの交流を通して震災について知り、命の大切さ、助け合うことを学んでいきます。支援を越えた先に、理解や共感が生まれてくることが語られています。